りびんぐらいぶず　令和3（2021）年4月第2号

浄土真宗のこれから（聞名ループの救い）

◆ご讃題

五濁悪時悪世界　　濁悪邪見の衆生には
弥陀の名号あたへてぞ　　恒沙の諸仏すすめたる。

（Ref『浄土和讃―弥陀経讃』「第八六首」註釈版 p571）

◆はじめに

異教徒異民族が仏教寺院の門戸を叩くのは、プラクティカルな瞑想を求めてである。

しかるに、浄土真宗は、これに教学的に応えることができず、上座部仏教のマインドフルネスメディテーション他の後塵を拝してきた。

その訳は、第十七願を「名号成就の願」という経典にはない解釈論で収めてきた点が一点、

第十八願のお心を「信心正因　称名報恩（信心が先で称名は信心獲得後の報恩感謝」である）と云う覚如教学に収め、昭和二十一年に宗制に定めて見直さないできた点が今一点であると窺われる。

（考察）大行を称名報恩という機受に据える姿勢を宗制に収めて見直さないようなことは、宗門人共通の課題としなければならない。

◆「本願、本願成就のご法話が伝わらなくなった」と総長が繰り返し危機発信された事態は、実践不足の旧教学に基づいたと窺われる。この問題に対処するには、第十七願を経典に示された通りに「諸仏称名の願」と頂戴し直し、本願成就は、第十七願から第十八願に繋がる「称名→聞名→信心」の道行きが経典に立ち返って明示されなくてはならない。

◆梵本で賜った救いのプロセスアプローチ

浄土真宗の救いは阿弥陀如来の名号を与えてその働きに遇わしめる救いである。

しかるに衆生は、諸仏（本質は回向の主体たる阿弥陀如来）が「名号」を与えてその働きに遇わせてお救いになる道行きを知らない。

なぜなら、衆生は、自らの宗教的要請に応えることを妨げる伝統宗学とざわめきの渦中にあるからである。

法蔵菩薩の本願を「物語り讃嘆」し、「称名実践」してお名号の存在をお知らせ下さったのは、諸仏如来（お釈迦様）である。

大経に明かされた本願の物語りに耳を傾け、称えれば聞こえて下さる称歎の声を聞名すれ

ばこそ、衆生は名号の働きに目覚め、微かに感動を覚えるようにできている。

◆初めての聞名が実現するときとは何時か。

お釈迦様の称歎のお姿は、七高僧によって伝えられ、他力の念仏者を経て既に届けられていた（Ref『歎異鈔第二条』三法門、註釈版聖典 p833）。

そのときこそ初めての聞名が実現しているときだったのだ。

祖父母がお内仏に額ずいて念仏する「往相正業」に衆生は、遇わせて戴いていたのである。「往相正業」は、衆生に恵まれた大行だったのだ。如来様のお手許で既に仕上げられた大行が往相の回向として衆生に本願力回向されてあったからである。

◆「大行」とは何か。

「大行とはすなはち無碍光如来の名を称するなり」という往相が回向されてあったのだから、衆生は「さあ、称えてご覧」とのお勧めそのままに行ずるばかり、「さようか」と頭を垂れて従うばかりだったのだ。

◆「さようか」とは何か。

如来様が、清らかなお心からお手許で仕上げられ（至心）、間違いなく衆生にお与え下さろうとお手立て戴き（信楽）、わが懐に摂め取らずばおくまい（欲生我国）と施して下さったまことのお心の通りに、頭を垂れる姿だった。

このとき「さようか」と頭を垂れた姿、如来様の促しに委ねる心（Entrusting Mind）こそが浄土真宗の「信心」そのものだったのだ。

◆漸く衆生には、お釈迦様がご案内下さった「南無阿弥陀佛と称えてお名号の功徳をお称えする「称歎」のお姿に習い、お内仏に額ずいた祖父母の姿に随念（ずいねん＝つきしたがう）してお念仏したいと思う心が生じるのだった。

これは、日常生活が破られ、私の心の裡（うち）に芽生えた「わたしもそうしてみたいと思う随念（乃至十念 Anusmareyus）」に他ならない。

それまでお浄土を知らず、それゆゑ浄土往生に全く感心がなかった衆生の上に、「生まれんと欲へ」との如来様の「欲生我国」のお心に習うて「如来様の御言葉こそまこと、私もそのように思い採らせて戴きます」と芽生えた心だったのある。尚、親鸞聖人は、「欲往生といふは、安楽浄刹に生まれんとおもへとなり」と仰せ下さり（Ref『尊像眞象銘文』第二条、註釈版 p645）、今生では、「摂取不捨」に当たると仰せである(Ref『愚禿鈔』註釈版 p539)。

心を静めて（止観の止）顧みるとき、私の心に芽生えるのは静かな第一の三昧(Meditation 瞑想)である。Anusmareyus の yus は、願望格であり、Anu はお委せして(be disposed to)諸

仏に続く意である。これは、藤田 宏達博士のご成果で Context（状況））上は、声が出ている姿だと明らかにされた。

また、「十念」の原意について梵本第十九願にお訊ねすると、「十たび心を起こす」の「起こす(pãdaparivartaih)」とは「回転する」だった。筆者にはこれは第十八願から第十七願に繋ぐ「聞名ループ」のループ概念を示唆するものと窺われる。第十七願、第十八願は、成就文では一聯に謳われていたからである。

◆「私も随念して念仏してみたい」と思い立った衆生は、いよいよ、自覚的に、聞名を目的とし念仏する段階に入る。第十七願のお心を顕す阿弥陀経の**「執持名号」**の梵語 Manasikãra は、聞思修の揃った、精神が活発に働く第二の三昧（止観の観）に相当するからである。

この三昧によって智慧が培われる（平成 30 年能仁正顕『般舟三昧経序説 p87』安居講義）。智慧は、浄土真宗の信心の実体だったからである。

阿弥陀経の「執持名号」は、浄土往生を願って行ずる念仏であると言われるが、既に大経第十八願の欲生我国を経、乃至十念を経たお念仏は、これに異なるものではない。

知識も表現力も要する本願の物語りを讃嘆する能力はなくとも、諸仏如来の称歎の後ろ姿に随念して、頭を垂れて南無阿弥陀佛と称える称名ならば衆生にもできる易行だった。南無阿弥陀仏と称名する姿は、衆生にも叶う「往相正業の姿」に他ならなかったからだ。

こうして衆生の上には、名号讃仰の姿が恵まれる。目的は、実に「聞名」にあったのだ。

「乃至十念」で諸仏如来に随念してお念仏したいと願う第一の三昧に始まり、聞思修を最高度に発揮して実践する讃仰の第二の三昧を通して聞名に与り、衆生は漸くにして智慧を賜るのだった。本願力回向された大行の実践を通して終に「智慧の念仏」「信心の智慧」という境地に導かれるのだった。

浄土真宗は、本願力回向された大行を衆生が称え、自ら聞名し、信心獲得に到る道行きに終に到達しなければならないとは桐溪 順忍和上の御言葉だった。合掌。

◆三月二十日（土）春の彼岸会　十四時、十九時半
◆四月三日（日）二十時～仏壮お聴聞の会
◆四月十七日（土）十九時半～仏婦お聴聞の会

著作編集兼発行元（本願寺派 正覚寺内）〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥